

# ソーシャルワークとジェネラル・ソーシャルワーク

樋 口 淳 一 郎\*

## Social Work and General Social Work

Junichiro Higuchi

**Abstract :** The shift of the state in all modern world to post modern world, we have to face the needs of the change of our attitude into the post modern society of the knowledge, of course on Social Work. I describe about the shift into post modern world, we get half-way. And on Social Work, in a way, the needs of the change of the attitude would contribute modern world make more post modern world. And, thus, this is it, the shift of modern world to post modern world is the shift of Social Work to General Social Work. This is one key point. And a perspective view of human being is another point, too. They go in parallel, as for modern to post modern, Social Work to General Social Work. In this article you can check them out.

**Key words :** モダニズム modernism ポストモダニズム post modernism ソーシャルワーク Social Work ジェネラル・ソーシャルワーク General Social work 人間観 a perspective view on human being

### はじめに

科学的ソーシャルワークは、1867年のイギリス慈善組織協会の設立に開始される。そのうち、アメリカ合衆国において普及したソーシャルワーク運動は、1877年、アメリカ慈善組織協会の設立に到る。アメリカ合衆国においては、ジグムント・フロイトの精神分析理論の普及にともなう形で、ソーシャルワークが各地で独自に活動し始めたため一種の乱立状況を呈したり。そのため、ソーシャルワーク自体が固有の対人支援方法としての基盤が、理論実践の両側面において脆弱化した。その反省から1955年、アメリカ合衆国においてNASW（全米ソーシャルワーカー協会）が設立され、ソーシャ

ルワークの混乱は一旦回避される。

1970年代以降、アメリカ合衆国において、ソーシャルワークの統合化の追及が本格化する。現在日本においても、理論的に先進するアメリカ合衆国に追随する形で、ソーシャルワーク統合化の必要性が語られている。従来の三分法に根拠するソーシャルワークによっては、生活世界に発生する諸課題の対応が不可能になりつつあることが、その直接的原因である。かつてNASWにおいて形態上ならびに組織上の統合が実現したことと同様、21世紀現在、ソーシャルワークの対人支援方法としての本格的な統合が必要とされている。内外に向けてソーシャルワークが根本基盤を拳証しなければならない。生活上の諸課題に対する解決策の提示ならびに実践はそれだけ複雑な様相を呈しているからである。その事情は日本においても変わらない。

\*関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究科  
臨床福祉学専攻 学生

対人支援の新しい方法としては、「ナラティヴ・アプローチ」を代表として現在多くの潮流が存在することに注目しなければならない。本論考において主題とする「ジェネラル・ソーシャルワーク<sup>2)</sup>」も、その潮流の一つである。ソーシャルワークからジェネラル・ソーシャルワークへの発展は、同時に近代から現代、またモダンからポストモダンへ、あるいは法則性格から脱法則性格への必然的な移行を確認する作業となる<sup>3)</sup>。

### 第1節 モダニズムからポストモダニズムへ

ソーシャルワークにおける「疾病モデル」に関する認識として、ようやく最近になって明文化され始めたところである<sup>4)</sup>「疾病モデル」が、本来「19世紀に大成功を収めた伝染病を治療する際の医療をモデルにして考えられた」モデルである<sup>5)</sup>点を見逃してはならない。19世紀の医療モデルは、特定の原因因子に一定の結果としての疾病が存在するという「単線的」理論認識であった。ソーシャルワークも発祥当初、支援科学として「原因—結果」の単線的理解から出発したのである。その意味から因果関係認識＝科学的法則的認識に捉われた発想に終始していた。このことはソーシャルワークが、近現代的＝モダニズム的発想にとらわれていたことを意味する。モダニズム的発想とは原因—結果を最重要視することに代表される「疾病モデル」的発想であったからである。この発想は感染症の疾病の治療に関しては大きな成果をあげその必然性・有効性を提示した。一方この事実と対照的に、1960年代以降の世界同時騒動はモダニズムの限界を提示したといえる<sup>6)</sup>。リッチモンドは、フロイトのアメリカ合衆国講演旅行の結果として発生した診断主義派に属している。診断主義はソーシャルワークの論考範疇に「環境」という要素を欠落させていた。したがって、1960年代に発生した世界同時騒動に「環境」という要素を欠落させていたリッチモンド風ケースワークは対応できなかった。この

ことは、単にリッチモンドのケースワークが世界同時騒動に無効だったことを示すだけではなく、ソーシャルワークに「環境」概念を導入することの必要性も示した。そして、「環境」概念の導入の必要は、リッチモンド風の近現代的ソーシャルワークの限界性を明らかにし、近現代から脱近現代への移行の端緒ともなった。

モダニズムに属する諸科学における認識体系は、近代科学に代表されるように、世界に存在するものはすべて、主観存在が何であれ、その形態認証にかかわらず、一定の形態として存在する客観的・物理的な存在であり、その客観的・物理的存在の現象の裏面に特定の法則が存在することを前提として認識し、その裏面に隠された法則を基盤として成立し、また運動するという世界観をもつ。疾病モデルを規範としたリッチモンド時代のソーシャルワークは、「モダニズム＝近現代」に属する対人支援発想だった。これに対し現在のソーシャルワークは「複線的」認識を基本として理論並びに実践展開がなされている。「疾病モデル」から「生活モデル」への移行である。それは、ポストモダニズム的世界観と深く関わる。ポストモダニズムにおける諸科学は、世界裏面存在法則の存在それ自体を否定し、モダニズム諸科学における諸法則存在を、人間個人、あるいはその認識主観が何であれ、およそ認識主観が、世界存在を理解するための方便的仮説であるとして、因果関係の擬態的性格を主張する。

脱近現代(ポストモダニズム)性格の観察は、主として対人支援の方法における時間的変遷の内に記録される。その代表例として、ナラティヴ・セラピーに関して叙述する。

ナラティヴ・セラピーの課題解決への姿勢は、基本的に人生における生活歴を二種類の物語として把握することであり、課題対象となる生活上の物語を、問題の染みこんだ物語として対象課題の措定をあたえることにはじまる。この問題の染みこんだ物語を、「ドミナント・ストーリー(優先的支配的物語)」として認識

し、ワーカーとクライアントが完全な協働作業を試み、「人生物語の書換え」を行うことによって、生活履歴に隠されていたもうひとつの生活履歴上の物語である「オルタナティブ・ストーリー（代替的物語）」の文脈を発見・措定することにより、クライアントの主観的認識の変革を試みるセラピーである<sup>7)</sup>。ポストモダニズムにおける世界裏面的法則への根本的疑惑・否定が、ポストモダニズム・セラピーにおける形而上的前提認識である。ポストモダニズム・セラピーにおいて、人間は法則的存在であるよりも一層脱法則的存在である。この法則から脱法則の移行がモダニズムとポストモダニズムの分岐点である。

## 第2節 大塚久雄と森有正

第1節で述べた、法則から脱法則への移行は、欧米諸国に端を発するにも関わらず、現在日本においても強い説得力をもつ。「世界同時性」とは、「社会の富裕化」に成功した先進諸国における限定的「世界同時性」であり、社会福祉学或いは経済学におけるように「古典的貧困＝絶対的貧困」という類の、純経済的生活課題にはなすすべがないことも確認する必要がある。ポストモダニズム世界における諸認識は、経済的に富裕化した地域でのみ感覚認識される世界体系であることが認識されなければならない<sup>8)</sup>。日本は「社会の富裕化」に成功し、先進諸国の一国内に位置するが、この事実は当然ポストモダニズムの理解される土壌が整備されたことを意味する。ソーシャルワークに関しても、社会の富裕化にともなって進展するポストモダニズムの土壌に移行し、立脚する必要がある。

大塚久雄は、高度経済成長期以降の日本の状況に対し、「高度経済成長以後、わが国に肉体的飢餓がかなり少なくなったことは事実でしょう。しかしそれに代わって精神的飢餓の問題がようやく前面に現われはじめた。」「最近社会的な規模で目立ってきた『心の貧しさ』の現象

は、その原因をただちに『生活の貧しさ』に求め、経済的な諸事情に照応させて理解するということは無理である。それを正面からいえば、現在社会的な規模で広がりつつある『心の貧しさ』の原因は経済以外の何かほかの社会的事情に求めねばならないのではないか、そう考えざるをえない<sup>9)</sup>。」と述べている。

大塚久雄はマックス・ヴェーバーの理論にその回答の範を求め、「近代の資本主義文化の行きつくところ社会全体の経営化、あるいは管理社会化が現れてき、その結果として、民衆のあいだには『精神のない専門人、心情のない享楽人』、そうした内面的窮乏ともいべき様相が社会的規模において広がってくる<sup>10)</sup>」という結論にいたる。

大塚の指摘は経済学の範疇においてのみならず、社会福祉学における「古典的貧困」から「新しい貧困」への移行をも我々に提示する。ソーシャルワークが、かつてソーシャル・ケースワークと呼称されていたこと、またケースワークという呼称の使用が現在アメリカ合衆国において停止されていることなどの諸事実をあわせて考慮する時、ソーシャルワーク全体の統合化という形において、実質的に「新しい貧困」に対応することの必要から、新しいソーシャルワーク体系が要請されていることに関する我々の認識を想起させる。The Younger Generation<sup>11)</sup>達の体験してきた事実の実態の検証を通じて、ソーシャルワークが新たな展開を必要としていることが理解される。大塚久雄と森有正の対談が、その時代における、日本の思想状況を端的に示す。

森 いわゆる合理主義というのは、今のフランスの典型的な批判的的のです。今の我々の生活をシステムにしぼりあげてしまった、それが合理的であればあるほど、人間を縛る力が強く、ますます奴隷化がひどくなるわけです。

大塚 それはその通りですが、そうすると、近代の合理主義に対抗するものとし

て、何を求めているわけですか<sup>12)</sup>。

大塚久雄が森有正の言葉に苛立つ姿が読み取れる。大塚は周辺論者から「近代主義者」と呼称されてきたが、大塚自身がこの呼称を快く思わなかったとしても、森有正との対談においては「近代の合理主義に対抗するもの」の明らかな名辞を要求する。大塚は近代合理主義の構築者・理解者として自負していたことが、森有正への詰問口調に至ったと推測される。

大塚の苛立ちには、当時の大学紛争を背景とした時代全体の大きな潮流に対する、大塚自身の理解を要求する心理が存在したことが原因している。森有正と大塚久雄の対談は1971年に行われた。1979年にジャン・リュック・リオタールによって「ポストモダニズムの概念」が提唱される8年前のことである<sup>13)</sup>。しかし、大塚が森との対談において性急に要求した名辞こそ、「ポストモダニズムの概念」であったといえる。1971年には明確な名辞こそ与えられていなかったにもかかわらず、1970年代には、大きく「モダニズムからポストモダニズムへ」という思想潮流の変化（森の論文名を引用すれば「変貌<sup>14)</sup>」）が確実に発生していたといえよう。このことは、Younger Generationの体験した思想的社会的潮流の変化・変貌は、「モダニズムからポストモダニズムへ」という思想状況・社会状況の変化・変貌である。

つまり、Younger Generationが経験通過してきたことの総体は、近代における合理主義への反発・反抗の表現であると理解することが妥当である<sup>15, 16)</sup>。

### 第3節 ソーシャルワークから ジェネラル・ソーシャルワークへ

ジェネラル・ソーシャルワークという言葉は、ソーシャルワークのような普通名詞ではない<sup>17)</sup>。この表現並びに方法体系全体は、太田義弘の独創的ソーシャルワーク全体に対して命名付与された呼称である<sup>18)</sup>。この呼称に類する言葉は多数存在する。たとえば、generalist social

work、generalist perspective、generalist approach、generalist practice、generalist practitioners、generalist model、generic social work、general method等である<sup>19)</sup>。これらは、1929年のミルフォード会議の主題である generic-specific 論争の影響を受けながら<sup>20)</sup>、ソーシャルワーク統合を志向する諸論考のなかで用いられたものである。ジェネラル・ソーシャルワークは、その日本における論考展開体系であると位置づけることができる。ジェネラル・ソーシャルワークとは、グローバルな視野で錯綜した生活や環境を把握する時代に要請が生み出した包括・統合的視野に立脚するソーシャルワーク方法論体系である<sup>21)</sup>。

我々の社会福祉実践の具体的領域である日本に考察範囲を限定すると、明治維新以降開始された近代化・現代化は太平洋戦争終結後一層その加速をみた。日本のシステムは先進諸国のシステムに根本的に依拠しており、その意味で近代発祥の地である欧米諸国の日本的展開が現在の日本であるといえる。

人間が行動行為するかどうかにに関して、現在我々は不可解な現実と直面し続けている。「実際には自分たちはなかなか自由にも主体的にも生きられず、けっこう非合理的なことをしてかしているという現実<sup>22)</sup>」が現前するからである。

太田は、「人間が、ある思想や心情を堅持するようになる背景には、必ず動機や理由がある。しかし、それはあまり論理的、客観的でないことが多い。人間は、それほど合理的、論理的に生きているわけではなく、直感的で生活をめぐる全体状況とバランスをとりながら臨機応変に生きている」と述べ、また、「人間や社会、福祉を語るため思想や信条が問われるときに、客観的に理路整然と理論武装した信念を述べようとする」と述べる。その時も、それらの根底には「論理の合理性や妥当性よりも、出会う人や師、書物など」が多く介在し、それらを通じて形成される人間性が、「社会福祉の哲学である価値の課題」を決定すると叙述する<sup>23)</sup>。

以上の間人観ならびに人間理解に立脚する太田のソーシャルワークが、かつての原因と結果の関係、因果関係を最重要視する「病理モデル」に立脚するソーシャルワークと、その本質を異にすることは自然である。太田は因果関係に焦点的根拠をおく、近現代的ソーシャルワーク・アプローチに対して、脱近現代的ソーシャルワーク・アプローチを形成したといえる。ポストモダニズム・アプローチの根幹には、人間を脱法則性存在として認識する志向がある。太田はモダニズムの法則性格＝原因と結果の因果律をよりよく認識しながら、脱近現代の脱法則性格認識の論考撰取に取り組んだといえる。太田の提唱する「ジェネラル・ソーシャルワーク」はポストモダニズムにおける脱法則性の観点に執着することなく、近現代と脱近現代の中間に位置しており、「ジェネラル・ソーシャルワーク」に、近現代と脱近現代の概ね理想的な折衷的人間理解があると評価できる。

ジェネラル・ソーシャルワークは、思想的には、人間理解の姿勢に関して、従来の原因と結果を最重視する因果関係に依拠する近現代的発想＝モダニズム的発想に拠った「ソーシャルワーク」から、因果関係を超越的に克服する、ポストモダニズムの発想に根拠を置く、あらたな対人支援方法体系としての有意義性が確認される。「ジェネラル・ソーシャルワーク」は「ソーシャルワーク」を克服したあらたな人間理解の本質をもつ、「ポストモダニズムとしてのジェネラル・ソーシャルワーク」である。この時点において「モダニズムとしてのソーシャルワーク」は「ポストモダニズムとしてのジェネラル・ソーシャルワーク」へとその時代移行を達成している。

モダニズムの限界は、原因と結果の因果関係に終始することにある。その限界をポストモダニズムの動きは克服する。しかしながら、太田の論考体系全体を支配するものは基本的に、原因－結果の因果関係をまったく無視するものではない。原因－結果への着目の有効性を十分に

認識しながら、その有効性では十分に対応できない福祉ニーズへの対応を可能とする人間観が、太田の人間観に確認される。

ポストモダニズムの限界とは、原因－結果の関係を軽視することにある。ナラティブ・セラピーを例に取れば、物語の書き換え自体は有効な対人支援方法であるが、そこで行われる原因－結果の因果関係を離れた治療的会話の前提に、原因－結果の因果関係重視によってもたらされた、近現代社会の富裕化が存在することについての反省・認識がほとんど確認できないことから了解される。

現在の人間観としては、モダニズムについてもポストモダニズムについても、それぞれ別の意味で、両方に限界があることは確認されなければならない。そして、太田の人間観は、モダニズムの限界とポストモダニズムの限界を、両者の中間の立場から折衷的に撰取することによって、双方の限界をよりよく克服している。

ソーシャルワークの原因－結果の重視から、ジェネラル・ソーシャルワークの脱法則的人間観の重視へと、ソーシャルワークは発展を遂げてきた。ジェネラル・ソーシャルワークは、近代のもつ原因－結果の重視に基本を置きながら、人間観においてその脱法則性を踏まえ、なおかつ脱法則性の限界を知悉しているユニークな対人支援方法である。その全方法体系は、近代の最良の成果とその限界、ならびに脱近現代の最良の成果とその限界の両方を折衷的に克服しながら、新しい社会の新しい人間への対人支援方法として存在する。

それらは同時に、一連の時代的変遷、モダニズムからポストモダニズム、あるいはそれら両者の狭間に立ち、苦悩した Younger Generation の諸経験の諸相変化の点検に相伴って、世界同時に人間観が変遷した事実を想起させる。

#### 第4節 社会福祉パラダイムシフト

日本のみならずおよそ世界の社会福祉は、伝統的に「古典的貧困＝絶対的貧困＝経済的貧困

＝貨幣的ニーズ」に対応してきた経緯がある。「社会福祉パラダイムシフト」理論は「貧困概念」の時代的変遷に依拠している。貧困概念の時代的変遷とは、「古典的貧困」から「新しい貧困」への貧困概念・実態の移行である。あるいは、古典的貧困から新しい貧困＝相対的貧困＝経済的な観点のみならず、生活全体における貧困＝非貨幣的ニーズへの貧困概念・実態の確実な移行・変遷の事実である<sup>24)</sup>。それは「新しい貧困概念・実態」の社会的発生により、生活全般における当該諸生活課題の解決を「制度・政策論」に期待することが不可能になったとことを意味している。以上が「社会福祉パラダイム・シフト」の理論的概観である。ここに「ソーシャルワーク論」が、マルクス経済学に根拠した展開をみせた日本社会の近現代状況＝モダン状況を克服した現在、社会福祉理論の中核として脚光を浴びる根本的原因がある。

近現代状況＝モダニズム状況には「制度・政策」を、脱近現代状況＝ポストモダニズム状況には「ソーシャルワーク」を適用させることが求められている。この事実は、太田義弘の提唱する「不分・併合的類型<sup>25)</sup>」から「分立・相補的類型<sup>26)</sup>」を経過してのちの「包括・統合類型<sup>27)</sup>」への移行と深くかかわっている。

以上のような状況を「社会福祉パラダイムシフト」と呼称する。これを簡単に図示すれば、以下のごとくである。

第一に、モダニズム状況・状態がある一定の円状況・状態を形成する(図4参照)。次に、時系列的経過と共にそこから別の円が存在を開始することで、二つの円がたがいに重なり合いながら、近現代か脱近現代状況・状態を形成する(図5参照)。第三に、異なる時系列的経過ののち、二つの円は各々固有の中心をもって、完全に分離する(図6参照)。この時系列の変遷における三相の変化における第二相が現在の「社会福祉パラダイムシフト」状況・状態である。

三段階移行は第一位相が近現代を示し、第二

相は近現代と脱近現代の重なりあった状況を示す。第二位相が実際現在の日本社会の状況・状態であり、近現代と脱近現代の重なりあいは、将来的に図形表現としては第三位相である、完全に分離した二つの円、近現代と脱近現代の二つの独立した円を形成すると想定される。

これらの移行がモダニズムからポストモダニズムへの移行であり、太田義弘の提唱する「不分・併合的類型」、「分立・相補的類型」、「包括・統合的類型」の三類型分類の移行と一致する。

重要な事実は、現在が第二位相に位置することであり(太田の提唱する第二類型である「分立・相補的類型」の位置)、近現代と脱近現代の重なりあった状況、第二位層は当分の間継続されるという事実である。この移行状況の動向に関しては十分な注意を払わなければならない。(以上の太田義弘における類型移行および第一位相から第三位相の類型移行に関しては図1～図6を参照。)

#### むすびに——新しい交通——

ソーシャルワークの対象範囲である「生活」、あるいは「生活コスモス」において、人格ならびに諸人格は、意識的にであれ無意識的にであれ、一定の生活環境に生活範囲を設定して生活する。この際の「生活環境の設定」が必ずしも合理的・理性的になされるものではないとする認識は、近代ならびに脱近代に関する本論考において既に展開してきたが、これらを一括して「生活圏」という発想で把握する論考的試みが現在散見される<sup>28)</sup>。その「生活圏」において「相互作用」「交互作用<sup>29)</sup>」が、クライアントの「生活圏内」において発生し、クライアントはその度、新しい環境適応のための何らかの対処的アクションを要求される。ソーシャルワークにおいては、当初「生活圏内」における「相互作用」にのみ焦点化して考察および実践を展開してきた経緯があるが、生態学・システム理論等の論考的導入により、「交互作用<sup>30)</sup>」に

考察および実践の焦点対象は移行した。この事実は発祥当初のソーシャルワークが、モダニズム性格に特徴的な、単線理解＝原因と結果＝因果関係に代表される法則性の追究にその主要な力点を設定していたことを意味する。これに対して、複線理解がクライアント理解と処遇を展開するために理論的にまた実践的に必要となったことは、1970年代以降におけるソーシャルワーク世界においては自明とされている。

最後に、今までの論証叙述とはいくらか観点を变えて、「環境（クライアントの生活圏）とソーシャルワーク」の観点から、単線理解から複線理解へと原因と結果の関係が複雑化する経緯をマルクスの見解から参考のために引用しておく。

生産諸力が発展すると、その結果として、生産者たちは、自分のうちに新しい資質を生み出し、自分自身を変化させる。また、彼ら生産者たちは新しい諸力、新しい諸観念、新しい交通（これにはいわゆるコミュニケーションも含まれている）の様式、新しい言語を創造しながら、自己を改造する。そういう風に人間諸個人の思考と行動

の様式に類型的な変化が生じ、そのように変化した人間諸個人が、在来の古い共同体という社会関係を解体させるような方向に向って思考し行動するようになる<sup>31)</sup>

人間生活における「生活圏」の複雑化・多様化・都市化という側面からソーシャルワークはその「生活圏内」における諸個人におけるニーズへの対応のために自らの存在様式を変化することを継続してきたが、「生産諸力の発展」が専らの契機となり、人間・諸人格が典型的に変容を達成することも脳裡に潜ませておかなければならない。

従来のソーシャルワークの方法においては、対応不可能な範疇であった「生活圏」に関する知識に根拠する理解・認識が多少なりとも拡大深化することは、クライアントの多様化する一方のニーズに応えるための明らかな一助となる。生産諸力が達成する「新しい交通」に関して、ジェネラル・ソーシャルワークはその発生させる生活上の諸課題に対応するべく、対人支援方法としての機能・構造・過程に関する自己研鑽を怠ってはならない<sup>32)</sup>。

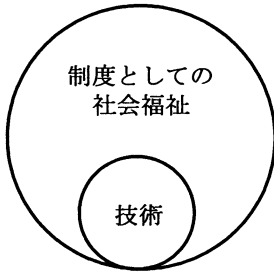


図1 不分・併合的類型

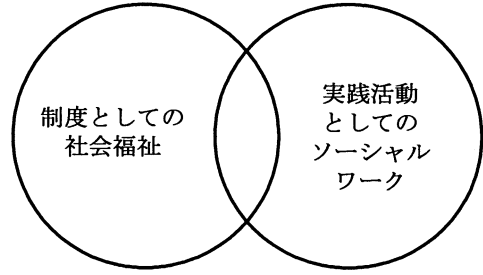


図2 分立・相補的類型

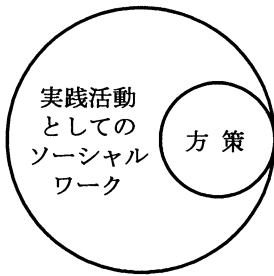


図3 包括・統合的類型

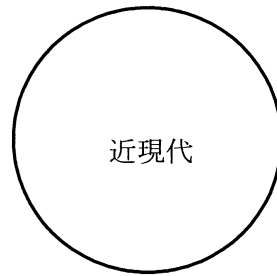


図4 モダニズム状況・状態

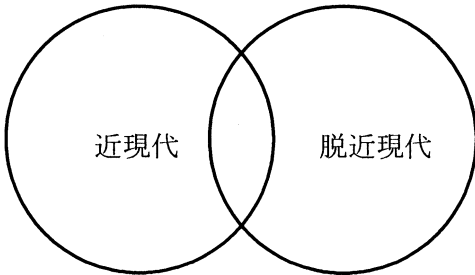


図5 モダニズムかつポストモダニズム状況・状態

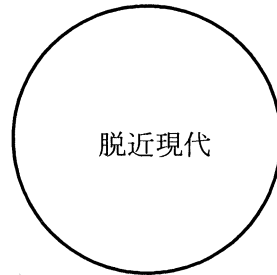


図6 ポストモダニズム状況・状態



注

- 1) フロイト理論に多くの欠陥があることは、常識になっているが、フロイトのアメリカ合衆国講演が行われた当時、時間的な近接からフロイト理論がアメリカ合衆国を席卷したことの責は、フロイトにもアメリカ合衆国民にも問えないと現在ではいえる。精神分析理論は対人支援理論であることから、当時のアメリカ合衆国のソーシャルワークは、おおきくその影響を受け、診断派のソーシャルワークを発生させた経緯がある。この誤謬は、のちに機能派ソーシャルワークの登場によって方向修正される。
- 2) 太田義弘・秋山薊二編著『ジェネラル・ソーシャルワーカー社会福祉援助技術総論-』光生館 1999年
- 3) 本論考におけるキーワードの一つである「ポストモダニズム」の日本語訳としては、本来「モダニズム」という用語の規定する年代に関する定義は複数存在する現状から、近代ならびに近現代を包摂する翻訳表記として、「近現代」の用語表記を採択する。
- 4) 矢幡洋『立ち直るための心理療法』筑摩書房 2002年 60頁
- 5) 同上 60頁
- 6) リッチモンド『ソーシャル・ケース・ワークとは何か』中央法規 1991年 56頁
- 7) 森岡正芳『精神分析と物語（ナラティブ）』日本評論社 1999年 78頁-91頁
- 8) 「ソーシャルワークと言葉」滋賀県社会福祉学会 2002年 自由研究口述報告
- 9) 大塚久雄『生活の貧しさと心の貧しさ』みすず書房 1978年 37頁-38頁
- 10) 同上 67頁
- 11) マックス・ヴェーバー『職業としての学問』において繰り返し言及される鍵概念 この鍵概念を大塚久雄は継承する
- 12) 大塚久雄『生活の貧しさと心の貧しさ』みすず書房 1978年 182頁 大塚はこの「近代の合理主義に対抗する」動きを、大塚自身とは「異質の基礎経験」をもつことが原因であると考え、学生達は「それを的確に表現する方法は、まだ持ち合わせていない」と述べている。さらに、「学生諸君は、場合によると、既成の理論的枠組に反発を感じている」と述べ、肝心なことに、「自分たち個々人の意思とまったく無関係に、なんらかの客観的法則があって、そこにわれわれは全体として動かされている」という理

論は「いまの若い世代には逆にどうも堪えがたいもののように感じられはじめている」と述べている。この記述は、森有正がフランスの大学紛争について、教員としての見解をもつことと同様、日本の教員の実感として貴重な記述である。そして、大塚の見解は、法則性に反発する学生の姿を彷彿とさせるに十分であり、この法則性への反発はポストモダニズムの最も顕著な兆候である。

- 13) ジャン・フランソワ・リオタール『ポストモダニズムの条件』の要約は次のような内容である。「近代を正当化する物語は無効になり、新しい知の条件が現れている」リオタール以外のポストモダニズム論者として、ミシェル・フーコー、ジャック・ラカン等における諸著作の邦訳が、ポストモダニズムの状況形成に大きく貢献している。ミシェル・フーコー『狂気の歴史』『言葉と物』『監獄の誕生』等、ジャック・ラカン『エクリ1』『エクリ2』等。
- 14) 森有正『旅の空の下で』筑摩書房 1969年 13頁 19頁 26頁 35頁 59頁 62頁 森有正におけるポストモダニズム経験は同書所収論文「偶感」の229頁から230頁に詳述されている。森は学問教育の観点から、ここで明確に自分自身の本質にたちかえり、本格的業績を開始したといえる。その業績は当時（論文執筆は1962年）、ポストモダニズムという概念・言葉が存在しなかったために、森自身にも概念として、また用語としての把握は困難だったと推察される。
- 15) 森有正による世界同時学生紛争の原因推察は以下の文献に確認される。森有正『生きることと考えること』1970年 133頁-134頁「43年5月に起こったパリの大学紛争の現場に」いた森は、その「思想的根拠がわりあいはっきり」と述べて、「一人前になっている大学生というものを、自身の属している生活、あるいは研究、そういうものにたいする決定権に参加させなければならないという主張」だったと述べている。なお、日本の大学紛争については、「何のための紛争かよくわからない」とも述べている。森はそれら一連の動向を「変貌」と題した論文の中で、詳細に論じている。森が「変貌」という言葉で述べたかったと推測される内容は、現在では「近現代から脱近現代=モダニズムからポストモダニズム」という枠組みで表現されると考えられる。

- 16) 大塚久雄と森有正は1960年代の世界同時的動向を、それぞれ(5)、(8)のように解釈している。社会福祉世界の用語で表現すれば「古典的貧困」から「新しい貧困」へ世界が移行したことその動きは確認される。その原因はポストモダニズムの兆候として多くの領域に確認されるものの(たとえば『ポストモダニズムとは何か』松柏社刊2002年)、フランス革命、あるいはロシア革命がなぜ起こったかという設問に対する解答ほどにはその解答は容易ではない。現実的には、複数の原因が生じさせたとして記述することが、研究する者の態度としては廉直であろうと考えられる。森有正にしても大塚久雄にしても、世界同時騒動の原因については、意見がそれぞれわかれており、原因の特定にはいたっていない。しかし、社会福祉の世界での仮説を設定することは可能であり、必要でもある。それは大塚久雄の仮説をおおむね支持する。大塚のいう「異質の基礎経験」とは、経済的富裕化に成功した結果生じたものであり、たとえばナラティブ・アプローチが経済的貧困状態にある人々にとって無効であることがこのことの論証補強となる。大塚のいう「異質の基礎経験」とは経済的富裕化に成功した地盤でのみ生じることであり、世界同時騒動の原因は経済的富裕化が最大の原因であると考えられる。したがって、近現代とは経済的富裕化以前の状態にあることを示す。また、脱近現代とは経済的富裕化以後の状態にあることを示すと考えることが適切である。1960年代の世界同時騒動が、なぜ先進諸国において生じたかということの理由説明はこれで十分であるだろう。以上の事実は、近現代の枠組みの無効は、経済的富裕化によって達成されるという仮説の設定にいたる(5)。(9)は、大塚久雄・森有正が、1960年代当時の世界同時騒動について、それぞれが感覚し解釈した内容の記述である。このことは、大塚・森の両者が1960年代の世界同時騒動において、近現代の枠組みの限界=モダニズムの限界を両者が同時期に認識し考えていたことを示す。
- 17) ソーシャルワークという表記はリッチモンドに帰属するが、現在では普通名詞として認識されている。
- 18) 太田義弘・秋山薊二編著『ジェネラル・ソーシャルワーク』光生館 1999年
- 19) 同上 18頁
- 20) 大塚達雄他編著『ソーシャル・ケースワーク論—社会福祉実践の基礎—』ミネルヴァ書房 1994年 82頁
- 21) 太田義弘『ジェネラル・ソーシャルワーク』1999年 光生館 17頁
- 22) 滝川一廣『こころの本質とはなにか』2004年 筑摩書房 22頁-23頁
- 23) 太田義弘『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』誠信書房 1992年 15頁-16頁
- 24) 古川孝順『社会福祉学』
- 25) 太田義弘「ジェネラル・ソーシャルワークへの再論」『龍谷大学社会学部紀要』第17号 龍谷大学 2000年
- 26) 同上論文 14頁
- 27) 同上論文 15頁
- 28) 上野谷加代子 大橋謙作『地域福祉論』全国社会福祉協議会 2005年 ただし、「生活圏」という概念規定に関して両者の見解は必ずしも一致していない。
- 29) 相互作用 interaction 交互作用 transaction 相互作用と交互作用は類似しているが正確には異なる。相互作用は同次元のシステム間における作用と反作用のことである。交互作用は異次元、多次元のシステム間の作用と反作用のことである。平易に説明すると、相互作用は同一システム内の多様な下位システム群内での相互交換、交互作用は下位システム、システム、上位システム間の作用と反作用のことである。前者は平面的、後者は立体的な相互交換が特徴である。エコシステム論、生活モデルでは交互作用を重視している。『社会福祉援助技術論Ⅰ』中央法規 2003年 103頁
- 30) 同上
- 31) 大塚久雄『社会科学における人間』岩波書店 1977年 106頁
- 32) 「新しい交通」に関する、その惹起原因となる仮定的要素として、森有正の著作に関する海老坂武の文章が参考される。『森有正エッセー集成5』解説から要約引用する。海老坂は森の業績に関して、「『一人称-三人称』関係にもとづく〈経験〉と、「汝-汝」の二項方式にもとづく〈経験〉とが触れあったときに、どちらが崩壊するか、と。そして森はこう断定する。「二項方式は一・三方式と触れると必ず崩壊する」『しかも森は、一・三方式に触れると必ず崩壊する二項方式の〈経験〉に滲透されているらしい私たち日本人が、ではどうすればよいのか、という問いを発するとき、主体の生き方の「変貌」一語

を残しただけで沈黙してしまった。』『彼がメッセージとして残したのは、結局のところ、日本人の経験の核心にある二項方式「上下に傾斜している」二項関係からの脱却であり、一人称の主体的な自己と三人称としての他人との理性的・意志的な関係—一・三方式を〈経験〉の中につくり出していく、ということであった。』(以上、「森有正エッセー集成5 解説 547頁—549頁」)

以上のような要素が、これからの日本社会において「新しい交通」の惹起原因の一つとして作用する可能性は否定出来ない。「新しい交通」

がどのような形でいつ顕在化するか、予測することは困難であるが、ジェネラル・ソーシャルワークはその人間類型に関する移行に対応するべく自己研鑽を怠ってはならないと考える。以上の原典はすべて『森有正全集』に収録されている。「新しい交通」の顕在化が、日本社会の崩壊という現象として顕在化することは十分考えられるという観点については、2005年6月日本地域福祉学会および日本社会福祉実践理論学会両学会において口述報告の形態において提示した。